今月の一冊

木更津市教育委員会 元教育長 西村 堯 選

ぼくはイエローで、ホワイトで、ちょっとブルー

ブレイディ みかこ 著 ・ 新潮社
ISBN978-4-10-352681-0
1,350円 + 税

新潮社のPR誌「波」に連載されていて、私は、毎号楽しみに読んでいた。それが、一冊の本にまとめられた。

本書をひと言でまとめるなら、人種差別、貧困差別の日常の中で柔軟にたくましく成長する親子の物語、ということになるだろうか。

イギリス、ブライトン市の元底辺中学校で日常的に起こる人種差別、貧困差別が「ぼく」「母ちゃん」(著者)の感想、怒り、悲しみなどと共に語られる。

とにかく、一気に読める。

しかし、各ページには、きわめて示唆に富んだ言葉が、さらりと述べられているので要注意だ。

「6.プールサイドのあちら側とこちら側」(p.86)を紹介しよう。

「ぼく」が市主催の中学校対抗水泳競技大会に選手として出場することになった。

プールサイドのこちら側は、生徒たちでごったかえしている。それに対して向こう側はたくさん空いている。

なぜか?と著者が問うと、隣にいたお母さんが言う。

> 「あゝ、向こう側は、ポッシュ校だから」
>
> 「ポッシュ校?つまり私立校ってことですか?」
>
> 「そう。こっち側は公立校で、向こうは私立校のサイド」
>
> (p.68)

著者は、

> 英国は階級社会だとか、昨今ではソーシャル・アパルトヘイトなんて言葉まで登場している、というようなことを、わたしはこれまでさんざん書いてきたけれども、こうもあからさまな形で見せられるといまさらながらびっくりするな。と思った。
>
> (p.89)

と言う。

レースも、公立校と私立校は別々に行われる。泳ぎっぷり、水着にいたるまで、まるで違う。一緒に泳いだら、もう、まったく勝負にならない。

さらに、公立校の中でも、また、差がある。

> 親の所得格差が、そのまま子どものスポーツ能力格差になってしまっているのだ。
>
> (p.93)

と著者は所感を述べる。

> 庶民とエスタブリッシュメント。99%と1%、という言葉が浮かんだ。正確には、2つのプールサイドの場合は6校と3校だが。
>
> (p.97)

と所感をつづける。

話は変わるが、「ぼく」の友だちに、ハンガリー移民のダニエルと、坂の上の高層団地(貧困層)に住むティムがいる。

ダニエルは、人種差別的な発言が多い。ティムとは仲が悪い。「ぼく」は、この二人の間に立っている。

こんなことがあった。

ティムの兄ちゃんが、車で「ぼく」を送ってくれることがあった。するとダニエルも、母ちゃんが、車で送ると言っている、という。

「ぼく」は、板ばさみになる。

ある雨の日に、両方から電話がかかってきて、「ぼく」は困ってしまう。しかし、「ぼく」は、両方断って、雨の中、ぬれて登校するのである。

エンパシーとシンパシーのちがいについての親子の問答も面白い。

「エンパシーとは何か」という試験問題に「ぼく」は、「自分で誰かの靴を履いてみること」と答える。

もっと細かな説明は、本書の75ページに出ている。誠に興味深い。

時々、「配偶者」(著者の夫、アイルランド人)が顔を出すが、この方がなかなか面白い。魅力がある。

そういう両親の中で、「ぼく」は育ってゆく。

先生方はもちろん、中学生にも楽しく読める一冊である。ぜひご一読を。

(なお、「波」誌の連載は、2020年3月号で終わり。残念!単行本がまた出るらしい。)

(さらに、英国での新型コロナウィルス感染者が20万人をこえ、死者も3万人をこえている。【5月7日現在】ブライトン市民の方々は、元気だろうか。)